

対馬丸を辿る数奇な運命

こともり
琴森 戀れん

沖縄の夏は毎年観光客で賑わうが、新聞やTV等のメディアは昏い戦時色に染まる。沖縄戦を直に体験された方の娘さんから貴重な話を伺ったので、ここで紹介したい。

娘さんの父である久高将吉さん（当時十二歳）は宮崎に疎開する為、ご両親と兄の将政さん（当時十三歳）の四名で対馬丸に乗船した。一九四四年八月二二日午後十時頃「ドーン」という爆音と共に船が徐々に沈没していった。対馬丸を撃沈した米国潜水艦ボーフィン号の魚雷が船底に命中した。ニッケネームは「真珠湾の復讐者」である。乗船していた人々は、瞬く間に海原に投げ出された。先生の「早く海に飛べ！」という声で一心不乱筏に飛び乗った。辺りは阿鼻叫喚の地獄絵図だった。将吉さんの筏には両親がおり、隣の筏には将政さんが乗っていた。将政さんが、自分も喉が渴いているのに、将吉さんの為に水筒を投げてくれたが、その水筒がペシャンコに凹んでしまっていた為、兄はもしかしたら負傷したのではと危惧した。お父様が筏を縄で括り二十名位は筏にいた。夜が明けると周囲にあった筏はなくなり将政さんの姿が消えていた。折しも台風接近の為、数メートルにも及ぶ三角波が筏や船を容赦なく襲った。筏と筏がぶつかり縄が解け始めた。筏にしがみ付いていた人々が、次々に力尽きて波間に消える。二、三日経つにつれ、お腹が空くという感覚よりも喉が渴いて仕方が無い。日陰はなく照りつける太陽の灼熱で意識が朦朧とする。水瓶や畳の幻覚を観て立ち上がり筏から鮫のいる海中に落ちた方もいた。将吉さんは魚雷の攻撃を受けた時に右大腿部を負傷してしまい立ち上がれず、縄を掴んだ儘堪えていた。漂流六日目頃ようやく救助船が来た。縄を掴んでいた手が拘縮し掌が開かない。救助され初めて怪我に気づいた。後日鹿児島島の病院に搬送され、大手術をして、終戦まで熊本で過ごした。

対馬丸を辿る数奇な運命

対馬丸が撃沈してから六年後、奇跡的な事件が起こる。家具屋を経営していたお父様の元に偶然家具を買い付けに来た奄美大島出身の西川さんが、奄美に對馬丸遭難者の遺体が埋葬されている話をし始めた。西川さんの案内で奄美に渡り、埋葬地を訪れて、ススキの茂る海岸の一角に佇む墓地を発見した。沖縄に戻ると直ちに遺族の方に相談し、沖縄民政府に協力を要請した。努力もあり百五柱の遺骨が沖縄に帰ってきた。その中に消息不明だった将政さんもいた。将政さんが浜に漂着していた事が判明したのは、着衣の名前で本人

確認が出来たからだ。当時流れ着いたご遺体は宇検村民の尽力により名前がノートに記載され埋葬されていた。遺骨だけではなく、遺品なども丁寧に保管してあった。又、二十一名の生存者は手厚い看護で命を救われた。なかには遺族が迎えに来るまで毎月一日十五日は墓参りを欠かさなかった集落もあった。同じ筏にいたらと、お父様は悔やんだそうだ。

弔いの為、お父様が奄美に渡り合同で埋葬された遺骨を纏めて収集し、糸満市米須の「魂魄の塔」に納めた。遺骨の代わりに、浜辺の珊瑚の欠片と丸石を拾い集め、お仏壇に供えた。

一方将吉さんの奥様の良子（よしこ）さんは対馬丸に乗船する予定だったが、定員オーバーの為、叶わず「練習巡洋艦鹿島」で、単身宮崎に疎開した。雪が観られるかもしれないと遠足に行く様な気持ちだった。婦人会の用意してくれた、冷や麦飯や南瓜、お芋の煮付け等の心が籠った手料理全てが美味しかった。大きな橙色の柿の実も目を見張った。沖縄の家族に手紙を書いたが音信不通で不安で仕方無かった。白昼B29の襲来で一心不乱に走り竹藪の中に隠れた。戦後沖縄に戻り、ご家族と対面する事が出来た。お母様は山原に疎開し助かった。将吉さんと良子さんのご両親が懇意にしていたので、二人はお見合い結婚をした。良子さんはミシンの技術を習得し、将吉さんは自動車教習所の教官として仕事に邁進し、三名の子供達を立派に育てあげた。

将吉さんは少年の頃から零戦に憧れていた。手製の零戦を作っては兄と一緒に夢中で飛ばした。当時は国の為に戦う事が美德だったのだ。ご自宅で木彫りの零戦を拝見した際に、その精巧さに見蕩れた。将吉さんは多才で油画も描かれており、対馬丸の沈没を描いた作品『絶叫』は沖縄県の平和美術展で展示された。対馬丸が撃沈され人々が荒れ狂う海に投げ出されている力作だった。

記念館の裏手に「海鳴りの像」がある。赤子を抱く母親のブロンズ像である。平和美術展の創設者が「海鳴りの像」を作られた美術家の宮良瑛子さんである。海鳴りの像は、対馬丸以外の船で撃沈した方々の御霊を弔う場である。今回瑛子さんに直接お話を伺うことが出来た。瑛子さんは長年絵画教室を開き、初期は女性群像ばかり発表していたのだが、戦跡を巡り、沖縄戦に触れるうちに「描かねばならない」と誓ったそうだ。瑛子さんは初対面の私にも親切に接してくれ、あの力作を創った方が眼前にいるのだと感動した。瑛子さんの力強い作品群に敬意を思い、褐色のブレスレットを差し上げた。喜んで頂き光栄だった。

将吉さんには今でも大切にしている新聞の記事がある。清武英利の『後列のひと』という本の紹介文である。装画に飛行機と特攻隊員のイラストが、若かりし夢と重なるのだろうか。若しくは温厚な将吉さんの性格上、最前線で戦う人々を影から支えたいと願ったのかも知れない。第一章の中に「沖縄特攻」のくだりがあった。将吉さんは予科練に入り、

特攻隊になる事を熱望していたので、余計に惹かれたのかも知れない。将吉さんは負傷した事で予科練への夢は潰えた。成長期の怪我のせいで現在でも右脚が左脚よりも四センチ短い状態で、歩くのにも大変な苦勞を抱えている。良子さんから見せて頂いた将吉さんの靴は右の靴だけ、ずしりと重たい。凝視すると脚底に分厚い中敷きが仕込まれている。左右差を調整する為に将吉さんが編み出した工夫がされている。又ズボンの裾は、良子さんのミシンによって左右の差を巧く裾上げして調整が施されている。対馬丸に乗船し、途轍もない過酷な体験を余儀なくされた将吉さんは、戦中から重たい右脚を抱えて今迄運命と対峙してきた。将吉さんを支える良子さんも大変な苦勞をされているのに、体験を語る表情は明るい。その明るさが余計に心を締め付ける。

今回の取材を受けて、娘さんの体験も紹介したい。子供の頃の記憶だが、毎年夏頃になると将吉さんが号泣しながら対馬丸の体験を子供らに話し始める。戦争が終わってもTVやラジオで流れる沖繩戦の特集でPTSD（心的外傷後ストレス障害）に苛まれて、激しく取り乱す父の姿を観て、夏が来る度、何年も苦しんだと語る。戦争という熾烈な体験は、正常な心をじわりじわりと蝕み、まるで消えないシミの様に家族にも広がってしまう痛ましさを感じた。

将吉さんは「対馬丸のことは忘れたと思っていたが、脚の傷がある限り決して忘れられない」という。対馬丸に乗船し、救助された将吉さんと、対馬丸に乗らず命を救われた良子さんの数奇な運命を目の当たりにして、まごうことなき命の奇跡を感じた。

平成二十九年三月十九日、将政さんのご遺体が漂着した奄美大島の宇検村船越（フノシ）海岸では「対馬丸慰霊之碑」の竣工・除幕式があった。雨天の中参加された遺族らは、犠牲となった家族の好物を手向け、浜では献酒が厳かに執り行われた。

今回取材を通して感じた事は、将吉さんの体験以外にも対馬丸や他の疎開船に纏わる大勢の人々の数だけ壮絶な体験が数多存在し、皆懸命に生きてきた波瀾万丈な過去を背負っているという現実だ。

今年是对馬丸沈没から八十一年である。対馬丸記念館では、攻撃の時間に合わせ、午後十時十二分に「夜の慰霊祭」が行われて遺族や関係者の黙祷が捧げられた。参列者達は、平和の象徴である鳩の折り紙を悪石島の方角に手向けた。「語り部」の方は現在僅か二名である。昨年は対馬丸生存者の平良啓子さんが逝去された。生涯を通して正に平和教育に尽力された方だった。

一方沖繩戦の記憶を次世代に継承すべく、県内の子供達が奄美大島へ向けて船で那覇を出港し、海上慰霊祭に参加した。又、大城立裕氏の原作を基にした創作組踊「対馬丸」が北谷町で上演された。先日のニュースでは、演出家の宮本亜門氏が実相を後世に残したい

との想いで、「対馬丸事件」を舞台化すると発表したばかりである。忌わしい戦争の事実を風化することなく若い人々に継承したいという情熱は着実に波及している。

先日対馬丸記念館を再訪した。小桜の塔の前で黙祷すると寒緋桜の葉擦れが、未だ海底で眠る幾多の人々の哀しい声にも聴こえる。館内に入ると、入り口左手に将吉さんの『絶叫』があり沢山の遺影の中には、将政さんを見つけた。まだあどけない顔の十三歳の少年が恥ずかしげにこちらをじっと観ている。将政さんは幼少期、身体が弱かったが、聡明だったそうだ。その後「魂魄の塔」に行き白菊を手向けた。奇しくも丁度十・十空襲の日であり、遺族の方が訪れては皆手を合わせて深々と祈りを捧げている。

私は彼此二十年、県内に偏在する戦跡巡りをしていた。そこで体験者から直に戦争体験をお聴きする度、形容し難い想いを辛くも形にしたいと思い、ここ数年は沖縄戦を主題にした詩や画の創作を続けている。作品に、彼等の無念な想いを少しでも表現出来たらという鎮魂の祈りを込めている。今後も沖縄戦を体験された方達の想いを忘れる事なく、微力ながら平和希求の伝達者の一員として、私なりの表現方法で、その想いの欠片を紡いでゆけたらと思う。

(了)

【参考文献・資料】

清武英利著『後列のひと・無名人の戦後史』

(公財) 対馬丸記念会「対馬丸記念館」公式ガイドブック

(公財) 対馬丸記念会「奄美大島と対馬丸」

(公財) 対馬丸記念館「対馬丸通信・第三十四号」

沖縄タイムス社「鉄の暴風」

沖縄タイムス社・電子版